

どれを読んでもおもしろそう？！

15歳の寺子屋 シリーズ こんなのはいかが？

『ひとり遊びのススメ』 茂木健一郎／著 2010

脳科学を研究している著者は、小学生のころ「健ちゃんがいなければ、山を探せ！」と言われていた。蝶の採取に夢中だった少年は、ひとり遊びが得意になっていく。分からないことを楽しむ、ひとり遊びで孤独を楽しむことを読者に訴える。同時に、自分が属する世界にのみ埋没し、物事を単純視することの危険性についても触れている。理学部物理学科を卒業した後、法学部へ入学した著者は、「文系」「理系」という境界線を引くことが学びの弊害となるのを恐れている。ひとり遊びの延長線上で様々な人との大切な出会いがあったことも紹介されている。

『ペンギンの教え』 小菅正夫／著 2009

著者が、旭山動物園の園長に就任した1995年、年間入園者数は20万人。どん底の大ピンチからおよそ10年後、2006年には年間300万人を突破する。生き物が大好きだった少年が、柔道部に入りた一心で二浪の末に北海道大学に入学し、選択したのは獣医学部。柔道に明け暮れて就職のことなど考えていなかった著者は、一枚の求人票をきっかけに旭山動物園に就職。著者は、「(就職してからが)一生のうちで一番勉強した時期」という。ワンポイントガイドをはじめたり、夢の動物園のスケッチを同僚と描いたり、動物の奥深さを伝えたい熱い思いが形になっていく。動物たちのイケメン好きや、異性を選ぶとき、選択権はメスにあるけどオスにはない話など、動物の話も面白い。

このシリーズには「編集部からみなさんへ」という言葉が、巻頭もしくは巻末に付いている。これは中学校生活最後の年齢である15歳の若者へむけたメッセージ。このメッセージには、この本が知識にとどまらない何かを学ぶ「場」として、または学校とは違う「出会い」の役割を果たすことを願う編集部の思いがこぼれている。

『ゴリラは語る』 山極寿一／著 2012

この本は、「みなさんが恋と友情のはざままで悩んでいた、家族のことで悩んでいた、なぜこの世の中から戦争や暴力がなくなるのだろうと考えているのなら、きっとゴリラはよきヒントを与えてくれる先生になる」という。ゴリラ一家にホームステイするために、ゴリラ流のあいさつやゴリラ語を学び、ゴリラ社会のルールを身に着ける著者。ゴリラのドラミングや突進が自己主張しつつも平和的に決着をつけるためのものであることや、遊びによって共感を深めていること、ニホンザルとの違いなどゴリラのこと意外と知らないかも、と思わせる。ゴリラのことを知ることで、私たち人間が見えてくる。

『ひとり』 吉本隆明／著 2010

「戦後思想界の巨人」と呼ばれる吉本隆明さんが、15歳の男女4人を相手に行った寺子屋授業をまとめた一冊。「話し言葉」が相手に何かを伝えるための道具だとしたら、「書き言葉」は自分の心の中に降りていくための道具だという話や、人は誰でも誰にもいわない言葉を持っている、つまり「沈黙も言葉」という話。そして「才能」や「正解」、「恋愛」といったテーマについても、時に文学や宗教を例に挙げながら話をしている。15歳の男女が書いた「寺子屋を終えて」というまとめも興味深い。

『みんなの論語塾』 安岡定子／著 2010

著者は漢学者の安岡正篤の孫。高校2年の時に心臓病を患い、中国古典への興味が深まった後、大学進学後にさらに『論語』を好きになったという。この本では、「学ぶこと」「挫折しそうなとき」「理想の生き方」「将来のことが不安なとき」などテーマに分けて論語を紹介。章句と現代語訳、そして著者の解説が載っている。孔子の弟子たちの紹介コラムがあったり、「もっと知りたい人のための『論語』ブックガイド」があったり、気軽に論語に触れたい方にはぜひオススメしたい！

『劣等生の東大合格体験記』 石黒達昌／著 2010

北海道の小さな町で医者の子として生まれ育った著者。中学受験、高校受験、大学受験と失敗が続く。そんな著者が、予備校の先生から「同じ働くのでも夢中になれるワークとつらいだけのレイバーがあることを学ぶ。著者は、いい先生との出会いの大切さを説く一方でいい先生と出会えなくても、自分が自分の先生になる方法があることも教えてくれる。

このシリーズの表紙には著者の写真が大きく使われている。それも、かきこまって着飾った様子ではなく、自然な様子が微笑ましい。愛妻弁当片手に黒板に数式を書く著者や、自分の仕事場で図面を広げた著者、満開の桜を背景に着物姿の著者、などなど。この人の話なら聞いてみようかな?!と思わせる演出に15歳の若者だけでなく大人も思わず手が伸びる?!

『明日は、どうしてくるの?』 栗田亘／著 2013

コラムニストである著者が、若い人たちが抱く疑問に様々な本を手がかりにこたえている一冊。その疑問は第1章から順番に、「なぜ勉強しなければいけないの?」、「なぜ学校に行かなければいけないの?」、「ひとりぼっちが怖い」、「自分自身が悩みなんです」、「夢を持たなければいけませんか?」、「明日は、どうしてくるの?」。著者が紹介する本の一節は、15歳の若者でなくてもグッとくるものがあるはず。巻末には「放課後読書ガイド」付。

『境界をこえる』 安藤忠雄／著 2012

大阪生まれの著者は、独学で建築家になった。中学校の時に熱心な数学の先生と若い大工に出会い、建築の世界に興味をもつようになったという。これまで、国内だけでなく、海外の美術館や博物館をはじめとして多くの建築を設計してきた著者の生き様が分かる1冊。建築家として様々な人と知り合い、助けを得て、社会のために建築を作ることができる人生を幸せに思う気持ちや考えがまとめられている。著者にとって、建築とは人間と世界を知るためのひとつの装置である。

『「フラフラ」のすすめ』 益川敏英／著 2009

ノーベル物理学賞を受賞した著者は、名古屋市の出身。昭和区の鶴舞小学校に入学したが、宿題をやらない劣等生だったという。しかし、本を読む面白さに目覚め図書館通い。そして向陽高校在学中に偶然目にした坂田昌一先生の記事から、最先端の研究が「おらが街」名古屋で行われていると知り、名古屋大学を目指す。ほかに、ガロアやアーベルといった数学者へのあこがれを抱き、フラフラ人生の原点となる。勉強がらいたった著者は、「勉強」には「強いる」という文字が入っているので気に入らない、学ぶことは大好きという。自称「興味の対象が次々と新しいものに移るフラフラ人間」が身近な人に思えてくる。